南市と安原仁兵衛（やすはらにへえ）

高島市役所安曇川支所のある安曇川町田中の南市区は、古くから高島郡南部の政治・経済・交通の拠点として注目されてきた地域でした。

地域内の「立市」などの小字名からは、この地に市が立てられたことがうかがえます。また「南市」の名前の由来については、北国海道沿いの宿場町の一つ「河原市」（現在の新旭町安井川）の南に位置する市だから、という説もありますが、はっきりしたことは分かっていません。

明治６年田中村地券取調総絵図のうち南市部分

記録上で名前が確認できるものとしては、東近江市に残る今から約５００年前の『今堀日吉神社文書』の中に、高島郡の南市の商人が得珍保（とくちんのほ）（東近江市に存在した荘園）の商人と荷物の運搬をめぐって争ったという史料があり、少なくとも室町時代ころには、南市の地に商人がおり、県内の他地域でも活動していたことが分かります。

江戸時代の南市村は、周辺の下ノ城・馬場・佐賀・上寺・薬師川各村とともに膳所藩領となり、郡内の膳所藩領を管轄する代官所がおかれていたことが知られています。村の石高は江戸時代を通して６８０石余で、村人の多くが農業に従事していました。一方で、江戸時代後半になると、河原市宿の助郷（すけごう）（宿場の人馬の不足を補う役）としての役割を担うようになり、このことによって村が困窮したという記録も残っています。

明治時代になると、南市村は周辺10か村と合併して田中村となり、中五反田に連合戸長役場が設置されました。この役場は明治22年の町村制の施行により誕生した安曇村の役場にもなり、その後、周辺には、学校、郵便局、駐在所、農会（後の農業協同組合）事務所、県農業試験場などの公共的な施設が次々と建設されました。

また、南市は政治家・事業家として郷土の発展に尽力した安原仁兵衛の出身地であることでも知られています。

安原仁兵衛は、南市の呉服商の長男として明治７年（１８７４）に誕生しました。29歳の時に単身で上京し、明治法律学校（現在の明治大学）に入学しました。卒業後は、帰郷して34歳のときに高島郡会議員に初当選し、その後は、安曇村長、県会議員、県会議員議長、衆議院議員を歴任し、その間、県の重要施策の一つとなっていた湖西鉄道の敷設に深く関わるようになりました。大正７年（１９１８）10月に結成された湖西鉄道期成同盟会では委員長に就任し、続く江若鉄道株式会社の発足に力を尽くしました。

念願の鉄道敷設免許がおりたのは大正８年、その２年後に大津の一部区間で営業が始まり、安曇駅までの路線が開通したのは昭和４年（１９２９）のことでした。その後、仁兵衛は政界の第一線を退き、江若鉄道専務取締役として会社経営にも携りました。現在、ＪＲ安曇川駅前には、仁兵衛の偉大な功績を顕彰して、銅像が建てられています。

問 文化財課
☎（32）４４６７

編集者のつぶやき

９月14日、安曇川中学校１年生の郷土学習「地域探訪」が行われ、子どもたちは、市内各地で高島の歴史や文化、産業を学習されました。表紙はそんな１コマ。楽農舎なごみの里代表の坂下さんから循環型農業の取り組みについてお話を聞いた後、ブルーベリーの木へ肥料をまく作業を体験。慣れない作業をがんばられました。こうした学習や体験を通じて地域の魅力を知って、郷土愛を深めていってほしいですね。（広報担当Ｓ）

広報たかしま
平成24年10月号 No.153
発行▼高島市　編集▼政策部企画広報課
〒520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑565番地
☎0740(25)8000(代)
http://www.city.takashima.shiga.jp
t-info@city.takashima.shiga.jp

R100 古紙パルプ配合率100%再生紙を使用。
PRINTED WITH SOY INK 大豆インクを使用しています。
不要となった広報誌は、その他古紙（雑誌）として古紙回収日に出していただきますようお願いします。